



# エコツアーカフェKOZU 神津島を 知ろう!!

紺碧の海、白い砂浜が広がる神津島。フィッシング、スキューバダイビング、サーフィンなどのマリレジャーのほかにも、天上山ハイキング、村内の歴史遺産の散策、温泉やキャンプなど、楽しみ方はいろいろ。都心からすぐのリゾートアイランド・・・それが「神津島」。



テーマ  
廿三夜様について他

## ゲスト 梅田勝海 さん

お気軽にご参加ください。事前申し込み不要、参加自由です。

「エコツアーカフェ」は、地域の未来に関心をもつ人が気軽に集まり、おしゃべりをする場です。

日時 **9月5日(木)午後7:30~午後9:00**

会場 開発センター

主催 神津島村商工会 (Tel8-0232)



## 寺山はばたの廿三夜様

溝響寺横の道路を海岸に向けて歩いて行くと、途中の左手に可なり勾配の強いコンクリートの階段が上の方まで続いているのが見られます。

此処はかつて「はばた道」と言って、途中の坂道になる所は平たい自然石を敷き詰めて斜路を作り、階段を無くしてあり、南部落の人たちには唯一海に出られる大事な道でした。

今は新しい道路が出来てから、道の役目を終えた道路敷きには植林がされて昔の面影はありませんが、当時道幅は五メートルほどあり、当時の村道から見ても大型の道路でした。

溝響寺の横を通るこの古い道は、左側に線香の香りのする墓地、右側には椎の木やタブの木(タメの木)の古木が鬱蒼と枝を伸ばし、日の光の届かない古木の根元は、奇怪な形にくびれたりして、子供たちには寂しいところでした。

また右手の土手の奥には「六本木」と言って何回伐倒しても芽生えて来た、タブの古木の株があり、其処には化け物が棲むと言われ、根株の周りには何段も石を積み重ねてあり、幼い頃これを見ないように走り抜けた記憶があります。

其処から道は下りの階段になっていて、其の両脇に石碑が建てられていました。

廃道になった今は、新しい道のコンクリートの階段を登ると、旧道は閉鎖されていて、石碑のある辺りは昔の姿を残しています。

登りきる右手に大型の「廿三夜得大勢至菩薩」と刻まれた石碑が、両脇に石燈籠を据え、右側には「脱阿弥陀様」と「楮国巡礼供養塔」の二基が並んでいます。

また此処から一段下がる平地の奥には、大きい石室に納められた地藏菩薩の石像が見えます、廿三夜の石碑と向き合う左手の囲いには、これも石室に納められた地藏菩薩の石像が祀られ、其の脇に猿田彦大神と刻んだ道祖神の石碑も見えます。

なお以前此処には、「大六天之塔」と刻まれた石碑が据えられていました、これは神津島港上の「大六殿」と呼ばれるところにありましたが、昭和四年(西暦一九二九年)の二月に、此処に忠魂碑を建てた事になり、其処の地名の元の「大六天之塔」の石碑をこのはばたに移したものです。

然し戦後この忠魂碑が取り払われてから、この「大六天之塔」の石碑は元の場所に移されていません。

「廿三夜得大勢至菩薩」の石碑は、この「はばた」と「秩父山」「横道」それに開発センター上の道路わきの四ヶ所で見ることが出来ます。

島では旧暦の一月の廿三日を「三夜待ち」と言って講を行っていたようです、私の祖母が(今晚は

三夜待ちだ」と夕方に出掛けるのを、見送った覚えがあります。

「廿三夜待ち」は女性中心の講で、子育てと安産を祈願したと言ひ、此れは月待ち行事でした。古くは「月天子」を、夜を支配した「月読みの命」、それに「勢至菩薩」を神としていたようですが、本来は月そのものを神として居た者と言ひます。

話を元に戻してこの道路の道幅が広いのは、文化三年（西暦一八〇四年）に瀧澤寺の伽藍建築の際、この道路を利用して伊豆辺りからの建築材の搬入をしたためと考えられます。

当然の事ながら其の頃の運搬手段は従て人肩で運んだので、道路の道幅は必要であったと思ひます。

この「廿三夜得大勢至菩薩」の石碑の裏に細い山道がありました、その道は神津島港の見える場所、お寺の住職が「今日の漁模様は」と港での人の動きを見たとこると言われ、「坊主山見」と言われていました、お寺の住職も島の人たちの暮らしを思い、漁の模様と人々の動きを見詰めていたと思ひます。

## 「神寄(かんき)の龍神宮」

カンキ礁は神津島港の入口を、外海の風や波から庇うように横たわる岩礁です。

このカンキ礁は、古文書の中では「神寄」と書かれ、島に来た神が一番先に船を寄せた所と伝えていきます。まだ神津島で築港の工事が始まっていない頃は、この「カンキ」と其の沖に横たわる「地内釜」(ジナイカマ)の二つの岩礁は、前浜に錨を下ろす漁船や五十集船(イサバブネ)を、風や波浪から守る防波堤の役目を果たして来ました。

当時は船溜まりが無いので漁を終えた漁船は、どんなに遅い時でも必ず船揚場に引き揚げ、又朝の出漁の時は船を海に降ろす、大変な労働を毎日強いられていましたが、其の船揚場の正面の「カンキ」は風除け波除として大事な船を守りました。

今は「もうり」の浜を含めて「前浜」と呼びますが、其の頃に「前浜」と呼ばれたのは、今市場(販売所)のある辺りで、明神様の前の浜の意味で、細かい砂の浜でした。

大漁で魚を満載した島の漁船は、船首を砂浜に乗り上げて魚の水揚げをしていましたが、それも大変な仕事でした、また東京から来た汽船は地内釜の沖に錨を下ろし、樽漕ぎの幹船は海老根(エビネ)と地内釜の間を通り、汽船とこの砂浜の間を何回も往復し、其の度に船首を砂浜に乗り上げ、お客やまた貨物を降ろしていました。

昭和の初期頃から始めた築港の工事は、「マナイ」「エビネ」「ジナイカマ」「カンキ」の岩礁を繋ぐ事が考えられ、「マエハマ」と「ナガサワ」の間に大型の間知石(ケンチイシ)を積み重ねることから始められました。

また「エビネ」と「ジナイカマ」の間は水深が深く、間知石の積み重ねは出来ないで六角形の鉛筆のお化けのようなコンクリート柱が何段も積み重ねられました。

今のように築港の基礎になるケーソンを沈める、技術のない時の基礎工事で、台風があるとこの鉛筆のお化けは港の中に飛び出す事があったそうです。

このように「カンキ」や「ジナイカマ」の岩礁は、古い時代から漁業を稼業にして来た、神津島の人たちの暮らしを大きく支えて来た、かけがえの無い自然の贈り物と言えると思います。

今、この「カンキ」の高い所に龍神を祀る祠が建っています。

コンクリート作りの祠の前には、これもコンクリートの鳥居が立ち、島の漁業で暮らしを立てる人たちの守り神として、篤い信仰を集めています。

雲や雨、風を支配するとされる龍神は、長い歴史の中で数え切れない海難事故、自然災害の折人々は無事をこの龍神に祈りを捧げたものと思います。

ある時、古老からこのような話を聞くことができました。

それは、まだ浅い春先の飛魚漁に出漁したが何故か一匹の飛魚も獲れず、漁を諦めて港に船を返そうとするのですが、思うように船は前に進まなくなりました、櫓を握る年配の漁師が力一

杯棹を漕ぎますが船は前に進みませんでした。

「これは憑物だ」と棹を握る年配の漁師がつぶやくと、「何を馬鹿な、そのようなものが居るわけが無い」と若者は言い返し、棹漕ぎを交代しますがそれでも一寸刻みの進みようでした。そのうちに船中のものも「憑物のせいだ」と思い込み、誰も声を出さなくなりました。

それでも港が近くなり、やがて「カンキ」の鼻を廻り込むと、急に棹が軽くなり船は港の中に奔りこみました。

これは「向かい潮流」の現象だと考えられます、船の進路と逆の潮流の仕業だと考えられます、また永年漁業を経験した人たちが其の事を知らないとは思えません、おそらく乗り組みの人たちが面白半分にした事が伝わっているのではと思います。

故山下彦一郎先生の遺著「神津島の故事古跡」の中に、

旅「本土」で死亡した遺骨を乗せた船は、龍神の前を通ることを忌み、「カンキ」の裏側に船をつけて、「遺骨」を其処から陸に揚げたもので、竜神の前を通るのは神威を穢すと謂って、漁師は恐れる、これは明神さま「物忌奈命神社」と龍神の間が船の通路で、船着き場の関門にあたるからであるとしています。

また、「怪しい光の玉が棹に探り憑いて、船を前に進める事が出来ず仕方なく、漁を止めて漸くの思いでこの龍神の前まで来ると、其の怪しい光の玉が舟から離れていった」など、矢張り古老の話を載せています。

島では始めての出漁の時とか、日常の出漁の時も必ず船を龍神の前に寄せ、船頭は海水を汲み取って船首に撒き、鉢巻を外した乗り組み一同と、龍神に向い手を合わせて深く頭を下げ、板子一枚下は地獄と言う海へ出て行きました、船首に海水を撒くのは神に祈るための禊の意味があるのでしょうか。

「カンキ」の龍神の前に、大きく岩を抉って出来た生簀があります、これは明治四三年（西暦一九一〇年）に漁業振興の目的でイセエビ番養のために作られたもので、下田の中田萬平氏が請け負って掘ったものです、其の他今の船揚場から「カンキ」の間に、ワイヤ・ロープでリフトを作り、滑車で人とイセエビを生簀に運んでいました、子供たちはリフトの首を真似て「ギリ」と呼んでいました、やがて大人も「ギリ」と呼ぶようになりました。

龍神は水を掌る神で、本来は水神であると言います、農業では雨乞いの対象の神で、漁業では海神として信仰されました、また台風の風や竜巻は龍神の昇天で、仏法を守る神でもあると居ます。

## 與種のいも神様

小学校通学路の右手の「庄右衛門の水神様」の前を通り、與種会館の手前の左側の階段の上にある、小さな祠を「與種神社」(ヨタネジノジヤ)と言います。

祭神は、江戸中期の蘭学者で甘藷先生と呼ばれた、青木昆陽を祀ると伝えていきます。

昆陽は、当時の伊豆諸島が度々飢饉に見舞われているのを見て、「さつま芋」の栽培を広めることが大事であると、幕府にその試作を薦め、幕府は大島・三宅島に数個の『さつま芋』を入れた箱と、栽培法を書いた「蕃薯考」を添えて送り、島の人達の食糧にしようとなりました。

今も台風の通り道である伊豆諸島は台風が二回・三回と襲来すると、島の麦、粟の穂も強い潮風に揉まれて一粒の稔りも無いことがありました、其のため島中が飢えてしまうことが度々あったと伝えていきます。

神津島村役場編の「村史年表」に掲げますと、

「享保二〇年(西暦一七三五年)は未曾有の凶年になり、飢えのための死者二百十一人、その内幼児百四人」とあり幼い子供の死者の多さと、其の時の悲惨なことが語り伝えられています。

神津島に「さつま芋」が何時頃移入されたものが、良く判っておりませんが、天明二年(西暦一七

八二年)に神津島役所から、葦山代官江戸役所に差し出した「書き上帳」に

「さつま芋」近年作り申し候、此れは享保二〇卯年、御公儀様被下置き候て作りはじめ、百姓夫食に仕り候」と言う文書が在ります。

また、目黒の滝泉寺にある(目黒の不動尊)があります。青木昆陽の記念碑の碑文に、

「宝曆八年(西暦一七五六年)都の人が神津島に漂着した時、さつま芋を食せさせてくれたので、」  
「さつま芋」がいつこの島にさつま芋があるのですかと尋ねると、

「享保の年、お上よりさつま芋の種を戴いたが、貯蔵の方法をしらないため其の種を腐らせて仕舞いました、けれども其の頃薩摩の人が島に居り、其の栽培と貯蔵の方法を詳しく教えてくれましたので、それから精出して作り習い、今は大板に入らないほどに良く出来るようになりました、また神津島は至って小さい島のため食物も少なく、飢饉で悩む事もありましたが、さつま芋を作ったからは食物の乏しい事も無く飢える人も無くなり島人も次第に増えて来ました、

其のお上のお恵みのあり難さの余り、今は小さな祠を建てさつま芋を祀っています」と刻まれています。(碑文を詳しくしました)

なを、神津島の三代目の官選地役人で島根県出身の、新井宣哉が記録した「萬年録(萬年録は明治四二年に着任した新井宣哉が解任される大正五年十二月までの、島の出来事を記録したものです)の中に、「本島の清水徳左衛門の先祖、丈助なる者漂泊して薩州藩地に漂着し、久しくその地の救助を受け、帰島の際甘藷を携え来たり、爾来その耕作年々に開け遂に島民の常食となり、凶年にも飢饉を免れるに至るを以って、その功勞を賞し山林を与えたり、青木昆陽先生記念

碑文中「徳川幕府より下付の甘薯貯蔵の方法を知らず腐れたるもその後薩州人島にありてその貯蔵を教え云々とあるはこの事実の相違なるべし」とあり、清水徳左衛門の先祖の丈助翁が、さつま芋の普及と島人の 飢饉を救った事実を薩摩の国人が居たと間違えたもの」としています。

「伊豆諸島東京移管百年史」の中で、新島村の収入役と測候所長を永年勤め、自宅に新島の歴史を語る資料を集め、新島博物館を運営していた、前田長八先生は、

「新島の古文書に拠ると甘薯栽培以前は、餓死者の記録が見えるが甘薯栽培後は一人の餓死者も出していない、明治二〇年頃まで「芋供養」と言って、毎年徳川吉宗の命日に当る、六月二〇日の早朝、島人は長栄寺と十三社神社へ参詣していた。

これは徳川吉宗が島人の生活を安定に導くため、甘薯栽培を薦めたことに対する感謝の念が残って居たものであろう」と記しています。

愛媛県の大三島に住む松岡進著「芸予最島史」(瀬戸内海文化研究所刊)に拠ると、

「享保一七年(西暦一七三二年)は史上に有名な蝗(イナゴ)の大発生による全国的な大不作の年で、世に言う「享保の大飢饉」の年で、伊予松山藩では三千五百名の男女が餓死している。

しかるに大三島(愛媛県越智郡の島で、大山祇神を祀る伊予三島神社がある)の大庄屋高橋又衛

門は、精米七百俵を藩に差し出した。

これは当時大三島に甘薯の栽培が普及して、「領内大三島一帯の地に餓死者の骸骨かざりし」と古文書に記録されているとしています。

これは同島の郷士、下見吉十郎(あさみきちゆうろう)が壮年の時四子を喪い、悲嘆に暮れて日本回国の旅に出て、途中九州博多でさつま芋の種を手に入れ、持ち帰ってから大三島に普及したものであるとしています。

また大三島や伯方島、広島県側の生口島また中国地方に下見吉十郎の報恩のためとして十二ヶ所に「いも地蔵」が祀られているとしています。

因みにこの大三島でも享保七年(西暦一七二二年)に大洪水が発生したり、享保九年(西暦一七四四年)は稀に見る早魃でその都度飢饉に襲われ島の人達は悩まされたと言います。

青木昆陽が伊豆諸島にさつま芋を送ることを幕府に薦めたのは、下見吉十郎が大三島にさつま芋を普及させた二十四年後で、北海道大学刊「続田園清話知引」に、「この瀬戸内海の島々のさつま芋の栽培状況を知った青木昆陽がそれを伊豆の島々に甘薯の栽培を薦めることになった」としてあります。

新島の「芋供養」は徳川吉宗の、瀬戸内海の「いも地蔵」は下見吉十郎への、それぞれ報恩の為と判ります。

目黒の滝泉寺の青木昆陽の記念碑には島人が『さつま芋』を祀っていますとありますので、さつま芋自体を神様として居たものでしょうか。

この與種神社の例祭日は、十一月十七日となっています。此れは島のさつま芋の収穫が終わる頃です。これらを考えてと矢張りさつま芋を御神体としても考えてしまえます。

明治四〇年(西暦一九〇七年)の七月八日の未明、七日七晩降り続いた雨の挙句、與種神社の裏山から突如鉄砲水が噴出し、死者十六人、全壊家屋三二戸、半壊家屋一六戸と言う大きな災害が起きました。與種神社も被害を受けたので、御神体を物忌奈命神社に移しましたがやがて元の場所に移されています。

言伝えに依りますと、この水害の起る前の晩の降り続く雨の中で、この予種神社と愛宕さま辺りから、雨は降る降る 鈴鹿は響る

雨の神津は 水が出る と唄う綺麗な女性の歌声を聞き、不思議に思い、用心した人たちは命拾いをしたと話したと伝えています。

今壽賢寺の鬼坂の手前左側に、この水害で犠牲になられた方の名を刻んだ、「殉難の碑」が建てられています。水害の折綺麗な女性の歌声を聞く例は多く、此れは水害の起る前兆で、金屬的な音を聞くと聞いたことがあります。

この與種神社の例祭日には昔のさつま芋の歌を「芋祭り」を行つたことも想像があるかもと考えています。

## 流罪人と流人墓地

大宝元年（西暦七〇一年）の大宝律令や、養老二年（西暦七一八年）に発布された養老律令の中で、犯罪者の刑罰を定めています。死罪に次ぐ刑罰として流罪があります。

犯した罪の軽重によって伊豆・常陸・安房・佐渡・隠岐などの遠流、諏訪・伊予の国の中流、越前・安芸の国の近流の地として犯罪者を送り込みました。

流人と呼ぶ犯罪者は殆ど期限無しの終身刑で、官中などでの慶事や弔事で赦免になることはあっても、それは稀な事で多くはそのまま流刑地で果てる事となりました。

江戸時代に入ってから徳川幕府は、寛保二年（西暦一七四二年）にお定め書百ヶ条を公布して、流刑を遠島（えんとう）と言いその流刑地を伊豆諸島に定め、江戸近辺の犯罪者を島に送ります。

先ず、遠流の地として、八丈島、此処は主に思想犯罪者を、

中流の地として、三宅島、此処は破産既罪者を、

近流の地として、大島、新島に軽犯罪者を送り、

神津島、御蔵島には島替えと云って、島で再び罪を犯した者を送り込みましたがこの二つの島は地形も狭しく食糧も乏しいので、再犯とは言え大勢の流人を送ることは無かったようです。

寛政八年（西暦一七九六年）になると、大島は本土に近過ぎると言う事で、流刑者を送らないようになりましたが、その時神津島や御蔵島は流刑地から外されたと言われています。

この制度は明治四年（西暦一八七一年）まで続き、明治十一年（西暦一八七八年）に伊豆諸島の行政が静岡県から東京府に移管された時、伊豆諸島の流人は許されて出島しましたが、この制度はいかにお上の都合とは言え、島の人達にはこの上無い迷惑千万なことでありました。

言う「仕送り」を受ける一部の流人や、手に職のある流人を除いては、その日その日の食を得るために、島の人の仕事の手伝いなどをして、食を得ていました。

その当時それで無くとも食糧の乏しい島の中に、島の人と流人が分け合うほどの食糧の余裕が果たしてあったのでしょうか。

考えて見ればこんな酷い話はありません。当時の幕府の偉い人や江戸の人たちは島や島の人たちをこれらの流人と同じように、蔑視していたのかも知れません。

神津島に送り込まれた流人の数は良く判っておりませんが、神津島村役場編の「村史年表」の後書きに「濟誓寺の過大帳に流人と思われる者、五十人余」とあります。また、宇須賀原の流人墓地には、日蓮宗不受不施派の僧の物と思われる墓石は十数基で残りの墓石については不明です。

湯澤寺付風の墓地の一面に、島の人達が無縁（むえん）と呼び線香を手向けている墓地があり、海で遭難して死亡した他国の船の乗組員や、流人も葬られていると聞きましたが、良く判つておりません。

慶長一七年（西暦一七九五年）、徳川幕布のキリシタン禁教令で改宗を迫られながら、それを固く拒み続けて同年の五月に神津島に流された、オタ・ジュリアと豊臣秀吉の千人供養に、招かれましたが、秀吉は不受不施派の信者では無いとして出席を拒み以後弾圧を受けていた、日蓮宗不受不施派の僧侶については、資料や記録が発見されて、その事実が裏付けられ、オタ・ジュリアの墓は宝印塔様の墓石で、神が活けられています、また不受不施派の僧侶の墓と判るのは十数基で、その中で流人墓地の東側に一際目立つ五輪の墓石は、隆賢院日照のもので、明和六年（西暦一七六九年）、三宅島に流されましたが、再藩の科で神津島に島替えになりました。

島替え後の日照は、峠山、松上橋の上で山下本館の辺りに住み、島の子供達に読み書きを教えたので、入寂の後これらの子弟が相談して、この五輪の墓碑を建立したと言います。

その他に正徳四年（西暦一七一二年）に、七代將軍家継の生母月光院に仕えた大奥の奥女中の取締役の江島が、江戸山村座の津波、生島新五郎と交際した事が咎められ、江島は信州高遠に流刑、生島新五郎は三宅島にまた、同座の狂言作者中村清吾郎外四名が神津島に流されたことや、明和八年（西暦一七七二年）に新島に流された流人四人が島逃げを企てたが、仲間の一人が裏切り島

役所へ密告したため捕らえられ、主犯の二人は新島で死刑、途中で企みを断った一人は神津島へ島買えになり、密告した者には褒美として島役所から、米一俵を戴いたと言う、文化六年（西暦一八〇九年）に、新島の流人安五郎と勝蔵が島逃げに失敗して、安五郎は神津島へ勝蔵は御蔵島へそれぞれ島替えになっていますが、これ等は三宅島や新島の記録の中に見られます。

新島から島替えになった安五郎を「武井のども安」としている資料がありますが、果たしてどうなのでしょう、大正五年（西暦一九一六年）の八月、岡山県金川町の不受不施派の本山の妙覚寺から教人の関係者が来島して、流人墓地に眠るこの派の僧侶を本山に移したいとして発掘をしたことがあります。

また、オタ・ジュリアについては、昭和四十五年（西暦一九七〇年）の五月に大勢のカトリック教会の信者の方をお招きして第一回のジュリア祭を行なうから、以後毎年五月の第二日曜日、大勢の信者の方、また韓国の信者の方も含めて巡礼団を迎え、カトリック教会の神父の司祭で、この流人墓地でジュリア祭が行われています。

ここは昭和の始め頃まで人家も少なく、辺りはタミの大木にぐみ墓が絡まり、昼なお暗く生い茂る寂しい所でした。

夜明け前の暗がりの中を一軒一軒巾着徳の、出漁を知らせて歩く少年たちはこの墓地を見ないよう駆け抜けましたが、今は家並みが続き昔を知っているのは年老いた者だけになりました。

神津島村役場編、村史年表より

◎講誓寺保存の過去帳から

本島における流罪人は、左記のオクイネ、不受不施の僧侶九人のみ明らかとされてきたが講誓寺保存の過去帳によって、外に五十七人と言う流人が記載されて、家老あり、代官あり、武士あり、町人ありという。

その素性等について以下羅列して記す。

死亡年	月	日	名	前	備	考
延宝四辰年	七月	二十日	次郎	兵	エ	
元禄五申年	八月	二十五日	角	兵	エ	
元禄六酉年	九月	二十七日	角	左衛門		
元禄九子年	三月	二十九日	久左衛門			
元禄十丑年	四月	一〇日	日惣法子竹井坊		僧侶	
元禄十一寅年	五月	二十五日	諫	兵衛	常分の流人	
元禄十五午年	十一月	十四日	法印良榮春良坊		僧侶	
宝永三戌年	七月	八日	平右衛門		武士	
宝永五子年	二月	十二日	石原清次郎		武士	

死亡年	月	日	名	前	備	考
宝永六丑年	七月	二十日	七	藏		
宝永七寅年	二月	一日	石助			
正徳二辰年	十月	一日	忠右門			
正徳三巳年	十月	十五日	久次郎			
享保元申年	四月	十三日	伝次郎			
享保二戌年	十二月	二十九日	長兵衛			
享保四亥年	正月	二日	伝左衛門			
享保四亥年	二月	七日	藤右衛門			
享保四戌年	二月	十日	伊兵衛			
享保四戌年	二月	十七日	半兵衛			
享保四戌年	三月	十一日	奥惣兵衛			
享保四戌年	四月	五日	伝左衛門			
享保六丑年	二月	五日	源造			

享保六丑年 二月 二十日 勘 平 三  
 享保七寅年 五月 一日 元右衛門 武士  
 享保八卯年 二月 二十一日 伝 兵 三 僧侶  
 享保八卯年 三月 一日 方印有真 僧侶  
 享保八卯年 三月 十九日 新五左衛門 武士  
 享保十巳年 二月 十七日 茂 助  
 享保十巳年 二月 十七日 五 兵 三  
 享保十二未年 正月 十一日 次右衛門  
 享保十二未年 正月 二十五日 長 五 郎  
 享保十二未年 四月 二十八日 森 兵 三  
 享保十二未年 十一月 二十日 赤 兵 三  
 享保十四酉年 十月 十二日 六 兵 三  
 享保十四酉年 十二月 十七日 敷 馬 前桑名藩家老  
 享保十四酉年 十二月 二十日 勝 之 進 武士  
 享保十六亥年 九月 十日 水 之 助 武士  
 享保二十卯年 六月 十四日 仙右衛門

元文五申年 正月 二十三日 八 兵 三  
 元文五申年 二月 五日 徳右衛門  
 寛保二戌年 八月 十六日 流人 教馬の室 鈴木太次右衛門で弔祭する  
 延享元子年 一月 十二日 奥惣兵三  
 延享元子年 二月 一日 五 助  
 延享元子年 二月 三日 五助の妻  
 延享元子年 二月 三日 治右衛門 教馬の家来  
 延享三寅年 十二月 十六日 勘 太 郎  
 延享五辰年 三月 十五日 長 四 郎  
 宝暦二申年 正月 十三日 通連了智法印 僧侶  
 宝暦九卯年 二月 二十八日 勘 兵 三  
 宝暦九卯年 九月 二十一日 太 兵 三  
 安永二巳年 七月 十日 了 空 僧侶  
 安永二巳年 九月 二十一日 五郎右衛門  
 文化五辰年 十月 二十日 達 歳

今度の話し合いに出て来る神や、仏の解説

廿三夜待ちと沖繩のニライカナイ

月待ちの行事の一つで、二十三夜に集る講で二夜様とか、三夜供養とも言いますが、かつては神津島にも存在したと見られ、島内に廿三夜得大勢至菩薩の石碑が数基見られます。

女性中心の講で、廿三夜に祭る神は、伊邪那岐神から夜の支配を言いつけた月読命、それに得大勢至菩薩を祀り、廿三夜講が単に月待だけの行事でなく、遠くから訪れる神を祀る厳肅な行事であったといえます。

◎ 月読命、伊邪那美命の左の目から生まれた天照大神には、「昼も夜もない高天原を治めよ」と命じ、右の目から生まれた月読命には「御身は昼も夜もある治領国（おすくに）を治めよ」命じられ、また鼻から生まれた須佐之男命には「御身は海原の国を治めよ」と命じられました。

月読命の任命された「夜のおす国」とは、伊邪那岐と伊邪那美の神が現に治められている大八島の国「現在の日本国」のこととされています。

また、「おす国」とは穀物、其の他食糧の世界を言うとしています。

◎、得大勢至菩薩、勢至菩薩は知恵第一の菩薩といわれ、この菩薩の赴く所、悪道が影を潜めてしまうという所から、勢至の名があると言います。

この菩薩は単独で祀られることは少なく、常に阿弥陀如来と行動をとるに、臨侍佛として祀られています。

◎、ニライカナイ、祭神は海の彼方に在って、海を司ると考えられている神で、わだつみの神とも言われる中国の竜王、龍神信仰と結び付いて、しばしば龍神と同意語に用いられています。元々は水神信仰に根ざすもので、海神のおわす海底の宮は西南諸島ではネリヤ・ニラヤ・ニイヤと、沖繩ではニライカナイと呼ばれ、目に見えぬ海の彼方の最も貴い国土或は楽土と観念されて、しばしば人間界と交通できる所と考えられています。

亀や魚は海神の使いと見られそれらを助けた為、迎えられて海底の宮に行く事が出来たという説話は広く分布しています。沖繩の国頭郡（くにがみぐん）と中頭郡（なかがみぐん）の沿岸部の村は海神祭（うんじやみまつり）として、六月や七月の亥の日に、海神を祭る行事があると言います。